

FUZZY NUDE 「静」

プロローグ

舞台前。

幕。

曲が静に流れる。

幕はうっすらと透けていて、舞台上が
少しだけ、ほんの少しだけ見えている。

舞台上、スリーピングマシーンにえな、ツララ入る。(または入っている)

中央付近、ぱっちゃん、さくら、小島、トリ、二十歳座る。

ぱっちゃん「どうしようもなく長い間、月が出ていて。もう朝が来ない幾万年後の午前0時」

さくら「人はそれでもそこにいて」

トリ「眠ってて」

二十歳「良い夢が見られるように」

小島「いつか気付いて」

さくら「それでも忘れたい」

トリ「完全が邪魔をしてて」

二十歳「アイラブユー」

ぱっちゃん「幾万年後の午前0時」

小島「太陽は誰かに盗まれて」

二十歳「朝起きたらすぐに誰かに会いたくなる」

ぱっちゃん「もう朝が来ない」

さくら「忘れてもいい」

トリ「徐々に不完全になるのなんて不可能で」

小島「君にプレゼントしたい」

ぱっちゃん「終わりが見えても諦めちゃだめでしょ？」

さくら「発端は」

トリ「もう始まっている」

二十歳「眠れる機械」

スリーピングマシーンだけが浮かび上がる

スクリーンに文字

「どれだけ眠っていたのかわからなくなって」

「目覚めた時に不安になる事がある」
「だけど目を閉じてる間」
「世界はきっと止まってて」
「私が目を開けるとスイッチが入る」
「1万年止まっていた世界が」
「どうか変わっていませんように」

人はいつの間にかいなくなっていて
スリーピングマシンに入っていたえなが目を覚ます。
マシンの横にある花を摘む

えな「またやっちゃった、私はすぐに逃げる、逃げ場所があればどこへでも。
どんどん逃げる場所が無くなって、選んだのは1万年後。
眠りは朝と夜を簡単に繋げちゃうから私はその間だけ自由になれる。
化学の鏡がぐるぐる回って好きなだけ眠れるようになって2年。
それを手に入れる為に働いて3年。使い方を覚えるのに2ヶ月。
ようやく使えて1万年。私は何度か繰り返した。
1万年前は恋してたっけ？彼が死んじゃって私は逃げた。君は見てた。
1万年前も君は私を見てた。」

ツララが起きる、マシンの横にある花を摘む

ツララ「私は観察する、過ぎる時間を記録して。理由はどっかに投げ捨てて
君を観察してる」

えな「また会ったね」

ツララ「おはようって言う決まりだったっけ？」

えな「おはよう」

ツララ「ビンゴ」

えな「ツララだったっけ？」

ツララ「名前？」

えな「うん」

ツララ「そうだよ、えな」

えな「私、そんな名前だった」

ツララ「忘れちゃったら名前じゃ無くなっちゃうよ」

えな「憶えててくれてありがとう」

ツララ「嘘かもしれないよ」

えな「私はむやみやたらに信じるよ、全部信じちゃえば嘘なんて無くなる」

ツララ「残った私の罪悪感はどうしてくれるの？」

えな「嘘は罪？」

ツララ「いつからかそうだよ」

えな「静だね」

ツララ「誰もいないみたい」

えな「責任取らなくて平気？」

ツララ「私の責任は私が取るから。生きるってそういう事でしょ？」

えな「本当に誰もいないみたい」

ツララ「君が言ったんだよ」

えな「なんて？」

ツララ「寝てる間は世界が止まってるんだって」

えな「また始まっちゃった、世界」

ツララ「そうだね」

えな「君と私は昔から友達だったんだ」

ツララ「そうだったっけ？」

えな「そういう嘘なら良いでしょ？」

ツララ「信じてあげる」

上手からぱっちゃんがゆっくりと出てきて歩を止める

ぱっちゃん「君のせい」

えな「世界が変わってたらどうしよう」

ぱっちゃん「世界は変わっちゃった」

ツララ「また逃げしてみる？」

えな「逃げるのはもうやめる」

ツララ「えならしくないね」

えな「らしきだって忘れられるでしょ」

ツララ「まだ咲いてるんだ、花」

えな「みたいだね」

ツララ「逃げられなくなった？」

ぱっちゃん「1秒あれば世界は壊れる」

えな「生きてみる」

ツララ「無条件で応援してあげる、私、君にそう言ってあげたかった。

どうしても悲劇になっちゃう世界で。

希望をあげたかった。でも本当は怖かったんだよ。

簡単に嘘ついちゃったら、小さいも大きいもきつと無くなっちゃうから
私の秘密がばれそうで、言えなくなった」

オープニングムービー

舞台セットからマシンが消える

0. 5場

えな「世界は3日間平和であればいい」

ツララと小島入って来る

えな「ツララと小島さん？」

小島「何してるの？」

えな「考えてる」

小島「いつもと同じだ」

えな「仲良いね」

ツララ「そう？」

小島「良い事だよ」

えな「いつも2人」

小島「それは君と」

えな「いつか私かもね」

トリとさくらが走りまわる

さくら「ちょっと待ってよ」

トリ「嫌だよ」

さくら「なんで逃げるの？」

トリ「逃げてないよ」

さくら「逃げてる」

ツララ「ちょっと後ろに隠れないで」

トリ「隠れてないよ」

さくら「隠れてるじゃん」

小島「ぱっちゃん」

さくら「返して」

トリ「これ？」

手鏡持ってる

さくら「私の」

えな「持ってきてたんだ」

トリ「だめ～」

小島「返してあげなよ」

ツララ「返してあげないよ、それでもちよつとの事で君達は取り戻すんだ」

ぱっちゃん出てくる

ぱっちゃん「世界は一秒で壊れる」

えな「君が来た」

小島「誰？」

ぱっちゃん「トリ」

えな「おはよう」

ぱっちゃん「おはよう」

トリ「起きたんだ？」

ぱっちゃん「おはよう」

トリ「起きないで欲しかった」

えな「私もそう思うよ」

ツララ「不安になるの」

さくら「あの」

トリ「さくら！！手鏡！！」

手鏡を上手に投げる

上手から出てきた二十歳が取る

さくら「二十歳」

二十歳、手鏡を覗きこみへたり込む

小島「なに？」

二十歳「私じゃない」

えな「嫌な事は忘れれば良い」

二十歳「これ！！私じゃない」

えな「おやすみなさい」

全員の移動、舞台上は空に。

1場

明かりが入る

さくらが入って来る。

鼻歌を歌いながら花を摘む

そこにトリが入って来る

トリ「さくら」

さくら「トリ」

トリ「花摘んでるの？」

さくら「造花だ」

トリ「見せて」

さくら「触るな」

トリ「見せてくれたっていいじゃないよ」

さくら「誰も見せないなんていってない」

トリ「見せてくれるの？」

さくら「造花だぞ？」

トリ「見たい」

さくら「見てんじゃん」

トリ「間近で見たい、距離ゼロでみたい」

さくら「頭悪い」

トリ「いい？匂いとか嗅いじゃうけど」

さくら「やるよ」

トリ「くれるの？ありがとう」

さくら「なんかしろ」

トリ「え？」

さくら「タダではやんねー。なんかしろ」

トリ「なにを？」

さくら「じゃあ分身の術。はい(手を叩く)」

トリ「(すばやく横移動しながら)どう？どう？見える？2、3人に見える？」

さくら「おお、すげー、見える。アホー人見える」

トリ「よっしゃあ、花ゲット！！」

さくら「じゃあ次は～」

ツララが2人を発見して

ツララ「おはよう」

トリ「おはよう」

さくら「ハイスピードで動くかに將軍のかに。はいっ！誰？」

トリ「(やりつつ)ツララだよね？」

ツララ「うん」

トリ「後ろにいるのはえな？」

えな「おはよう」

トリ「超久しぶり！元気だった？」

えな「だったのかな？てか何してんの？」

ツララ「かにじゃない？」

さくら「ねー誰？」

ツララ「誰この子？はじめましてだよね？」

さくら「やめていいよ。誰だよ、トリ」

トリ「ツララとえなだよ。知らないんだっけ？」

ツララ「ハアハアしてる」

さくら「しらねー」

えな「なんって言うの？名前」

さくら「ん？名前」

トリ「さくらだよ」

ツララ「さくらって言うの？」

さくら「そうなの？」

トリ「呼んでるよ？いつも」

さくら「それが私の名前らしい」

えな「らしいんだ」

さくら「らしい」

ツララ「大丈夫この子？」

さくら「大丈夫だ」

トリ「大丈夫だよ」

えな「他の人は？」

さくら「他の人？」

トリ「ねー、久々にあったんだからなんかしようか？」

ツララ「なんかって何？」

トリ「何しようかな？ねー何する？」

さくら「聞いてるよ」

トリ「じゃあ鬼を決めます」

えな「いないの？」

トリ「鬼は一人ね」

ツララ「普通そうだよ、鬼って一人だよね」

さくら「人って人？他に誰か居た？」

トリ「いないよ、じゃあジャンケンしよう」

さくら「なんだそれ？」

えな「いないの？」

トリ「誰もいないわけじゃないよ、と言って。

その後続ける言葉を必死に探した。

この世界に人はほとんどいなくなっていて。

どうやってそれを伝えれば良いのかわからなくなりそうになった。

現実が重すぎて私はまた眠ろうとして

それでも私はたった一人の為に眠るのをやめてたんだから。

簡単じゃないよ。だけど決めたから。

君達を巻き込んでごめんなさい。一人はもう嫌だった」

えな「さーじゃんけんしようか。何するか知らないけど」

トリ「え？」

ツララ「聞かないの？」

えな「なんか聞きたくない間だった。なんかこれから嫌な感じの事言いますよ。

みたいな。ゴリラがこれからうんこ投げますよ的な間っていうの？

あるでしょ？準備期間みたいな」

ツララ「確かに、まるで独白でもしているかのような間だった」

さくら「してたよ」

えな「で、どれぐらいいるの？」

トリ「聞くんだ」

えな「聞いて欲しいでしょ？」

ツララ「的な間だったよ」

トリ「えっとまず、ほとんどいないよって言うのを前提に。

まず、現在正常に動いているロープが三台。

あっ、2人が出てきたから1台。あとは全部壊れてて。

多分生きてる人間が一桁」

えな「最高じゃん」

トリ「え？」

えな「ごちゃごちゃしてなくていいよそれ。

大体さ、眠った人間なんて社会不適合者でしょ？

住みやすい世界だよ。ユートピアだね」

トリ「饒舌にならないでよ」

さくら「ロープって何？」

ツララ「そっかいつかそうなると思ってたっていうか、それが自然なんだよね。

きつと。人間ってほんとは100年生きられたら勝ち組みたいな生き物だし。」

えな「そうそう、私超長生きしてる、ほとんど覚えてないけど」

さくら「ねーってば」

トリ「そんなに軽くないよ」

小島入ってきて

小島「あれ？」

ツララ「あー小島さん」

小島「起きたの？」

ツララ「おはよう」

小島「おはよう」

えな「誰だっけ？」

小島「えなでしょ？」

えな「うん、いたっけこんな人」

小島「こんな？」

ツララ「いたよ、小島さん」

さくら「小島」

小島「さんつけろ」

さくら「嫌だ」

えな「なんで？さん付けなの？先輩？」

小島「呼び捨てられんの嫌い」

えな「それだけなんだ」

小島「あるとないとでは大違い」

ツララ「なんか大変みたいだね」

小島「聞いたの？」

ツララ「うん」

小島「最悪だよ、男いない」

えな「え？男いないの？」

小島「聞いたんでしょ？」

ツララ「聞いてないよ」

小島「何を聞いたの？」

トリ「言い忘れてただけだよ」
小島「男はほんの24年前に絶滅した」
トリ「小島さん」
えな「前言撤回、最悪だ」
小島「で、この子、最後の男の娘」
さくら「男？」
トリ「小島さん！」
えな「え？じゃあこの子」
小島「現代っ子」
ツララ「どうりで見た事ない、でも珍しいね」
小島「でもって実は」
トリ「小島！」
小島「呼び捨てにしないで、何？まだ秘密にしてるの？」
さくら「秘密はダメだろ？トリ」
えな「何？何？」
小島「言わないよ」
ツララ「そこまで言って言わないのって反則だ」
小島「言って欲しくない人がいる場合は言わないのがルールでしょ？」
えな「言って欲しくないの？トリ」
トリ「狩り行ってくる」
ツララ「え？」

トリはける

ツララ「狩り？」
さくら「鹿取るの」
ツララ「鹿？」
小島「鹿ばかり、飽きるけど以外と美味しいよ」
えな「鹿しかいないの？」
小島「うん、他絶滅した」
ツララ「しかってそんなに生命力あるの？」
小島「めちやくちや増えてる」
さくら「鹿はうまい」
えな「鹿か～」
小島「ところで秘密知りたい？」
さくら「言っちゃダメだ、トリが嫌がったから」

さくらんお花を見て

小島「まだ作ってるんだ？花」

ツララ「秘密」

2場

小島とツララ残り、ストップモーション

後ははける。

ツララ「怖いですかね？やっぱり？」

小島「ええ」

ツララ「でしょうね、それでもなんですか？」

小島「はい」

ツララ「それよりも嫌なんですか？」

小島「今が」

ツララ「今が怖い？」

小島「未来も怖いかもしれません、わからないけど。

先に進むしかできないから、そこに行くしかなくて」

ツララ「今と変わらないかも」

小島「私、写真を撮るのが好きで。その世界ではみんな止まってて。

笑ってたり泣いてたり」

ツララ「たくさん撮ったんですね」

小島「はい、それでもっと違うものが撮りたくなって」

ツララ「未来？」

小島「未来じゃなくてもいいんですけど」

ツララ「戻れなくなりますけど」

小島「どうせなら戻れない方が」

ツララ「例えば一万年先」

小島「いけるんですか？」

ツララ「理論上は可能です」

小島「眠るだけで？」

ツララ「眠ると言っても、リスク高いですよ。

もしかしたらロープの中で死んじゃうかも知れませんよ」

小島「そんな危険な機械なんですか？」

ツララ「5年とかのサイクルでしか実験してないのでなんとも言えませんが」

小島「いいですよ。死ぬより眠る方が楽だし」
ツララ「あと若干の副作用があって」
小島「構いません」
ツララ「え？」
小島「私、今、死んでるようなものだから。覚悟してきたんです。
自分でも信じられないくらいアグレッシブなんです。」
ツララ「怖くないの？」
小島「怖いですが、でもこのまま生きていくほうが怖い」
ツララ「そうかもしれない」
小島「あなたも？」
ツララ「怖いかも」
小島「だから眠るんでしょ？あなたも」
ツララ「私？」
小島「だからまた会えたんです。ツララさん」
ツララ「私、ツララでしたっけ？」
小島「違うの？」

3場

2人はけて。
ぱっちんが入って来る
原始的な武器を持っている。
上手から表れて下手にはけていく。
若干スローモーション。
上手で爆発音(機械が壊れる音)
ぱっちん早歩きで上手へはける

「残り4台」

咳込みながら上手から二十歳出てくる

二十歳「誰？(上手へ行って)壊れてる。誰？」

さくらが鹿を追いかけている。
武器持ってる。

さくら「鹿じゃない」

二十歳「あなた！」
さくら「何？誰？」
二十歳「私のロープ壊したでしょ？」
さくら「壊してないよ、ロープって何？」
二十歳「しらばっくれるの？」
さくら「何も壊してない、疑うな、バカ、死ね」
二十歳「壊したでしょ？」
さくら「見たのかよ」
二十歳「見てないけど」
さくら「じゃあ疑うな、バカ、死ね、床下浸水で死ね」
二十歳「あなた誰？」
さくら「さくらって言うんだってさ」
二十歳「そう。誰か見なかった？」
さくら「鹿を見ていた、鹿は早い、鹿は走るとやばい。死ね。毒林檎が
喉に詰まって死ね」
二十歳「私に言ってるの？」
さくら「誰お前？」
二十歳「二十歳」
さくら「二十歳？」
二十歳「そうだよ」
さくら「生きてるの？」
二十歳「うん」
さくら「鹿は？」
二十歳「え？」
さくら「鹿は？」
二十歳「何その質問？」
さくら「答えろ、鹿は？」
二十歳「あっち行った」
さくら「そうか、ありがとう」

武器持って走っていく

二十歳「狩り？それよりもロープ、探さないと。はやく寝ないと。歳取っちゃう」

えな入って来る

えな「あ！！人！あの一」

二十歳「はい」

えな「こっちに女の人走って来ませんでした？」

二十歳「来ましたけど、そっちに女の人走ってきませんでした？」

えな「来ましたけど」

2人「追いかけないと！」

2人ともはけようとする

えな「あの一」

二十歳「はい」

えな「どっかで会いました？」

二十歳「ごめんなさい、私、今起きたばかりで思い出せないんです」

えな「今起きたばかりなんですか？」

二十歳「はい」

えな「じゃあ最後に残ってたロープってあなた？」

二十歳「最後？最後だったんですか私」

えな「ええ、私達の以外壊れちゃってて、最後です」

二十歳「そう、使えそうなロープ知りませんか？」

えな「使えそうなやつ？」

二十歳「私の壊れちゃって」

えな「私のやつまだ使えるかもしれませんけど」

二十歳「私それで寝ちゃダメですか？」

えな「え？」

二十歳「はやく寝ないといけないんで」

えな「せっかく起きたのに」

二十歳「歳をとりたくないんです」

えな「はあ」

二十歳「年取ったら最悪ですよ。ダルンダルンになるでしょ？

全体的に。蠅とか集ってくる確率も高くなるし。

ダメなんです私。もう1歳も歳をとらないでいたいんです」

えな「なんか、すごいですね」

二十歳「お願いします、譲ってください」

えな「まあいいですけど、でも私も起きたばかりなんで。

あと一週間は使えないと思うんですけど」

二十歳「待ちますよ」

えな「じゃあいいですけど」

二十歳「やった」

えな「必死ですね」

二十歳「やっぱし素敵な恋するには若くないとですよね！」

えな「男いないですけどね」

二十歳「え？なに？」

えな「男、絶滅したんですって」

二十歳「(絶叫)なにそれ？しんじらんない。え？おえっ。おえっ」

えな「嗚咽？」

上手から鹿を引きずってさくら

さくら「倒した」

えな「勝手にどっかいかないでよ。いつも帰って来れないんだから」

さくら「鹿は早い、追いつくのにかかり、林を抜け、森を抜け、
道に迷う」

えな「さくらはインディアンなの？」

二十歳「嘘ですよね」

さくら「嘘じゃない、鹿は早い」

二十歳「男がいらないなんて嘘ですよね？」

さくら「男？」

えな「本当らしいよ、私も会ってないし」

二十歳「がっくし」

えな「口で言った」

さくら「どうしたの？二十歳」

えな「二十歳？」

さくら「名前」

えな「名前？歳じゃなくて？」

二十歳「歳も」

さくら「二十歳って何歳？」

えな「そんなにショックだったの？」

二十歳「起きて、ロープが使えなくなる10日間の間。

恋をするのが楽しみなんです。花火みたいな。

一瞬で火がついてすぐ散っちゃうような」

さくら「造花なら作れる」

えな「それなら散らないよ。二十歳」

二十歳「造花？」
さくら「約束したんだ」
えな「ん？」
さくら「2人で」

4場

えながいなくなり。
舞台上、さくらと二十歳
ストップモーション

二十歳「さくら、転校しちゃうって本当？」
さくら「うん」
二十歳「また会える？」
さくら「会えるよ、きっとさ」
二十歳「みんないなくなっちゃう」
さくら「いなくなてならないよ」
二十歳「おかしいよ、みんな眠っちゃって起きないなんて」
さくら「おかしいかな？」
二十歳「さくらのお父さんだって」
さくら「聞いたんだ」
二十歳「噂」
さくら「起きないんだ。また会おうって言ってた。

外から何をしたって何も起きなくて、お母さんは
機械を壊そうとしたんだ。それは何万年前だったか
私は忘れてて。そこは真っ白。何もなくなって。
何かがあった温もりとか痕跡だけしか感じられなくなった。
でもきっといつかそれもなくなってしまうんだよね。
私は何万年後の世界にまた居た。真っ白だった」

さくらと二十歳ははける。
ぱっちゃんとツララ入って来る
ストップモーション

ぱっちゃん「どうなっているんでしょう？」
ツララ「どうかしましたか？」
ぱっちゃん「混乱してて言葉がうまくみつからないんですけど」

ツララ「混乱」

ぱっちん「なぜみんな眠ってしまうんですか？」

ツララ「わかりません」

ぱっちん「あなたが作ったんでしょ？」

ツララ「私が作った？ そうかもしれませんね」

ぱっちん「新聞記事」

ツララ「はい」

ぱっちん「書いたの私なんです」

ツララ「読みました」

ぱっちん「どう思いました」

ツララ「旦那さんが亡くなったんですよね」

ぱっちん「あなた方の作ったその」

ツララ「ロープですか？」

ぱっちん「それに入って」

ツララ「ちゃんと確認は取ってますよ。機械といっても

性質上、使用してしまうと我々にはどうしようもありません。

リスクは最初からあるんです。使用者にはそれを事前に

確認してるんです」

ぱっちん「残された人間はどうすればいいんですか？」

ツララ「さあ、それは私には。残されないようにするしかないですよ」

ぱっちん「そんな」

ツララ「現状のままにするつもりはないんです。ちゃんとデータも取ってますし。

改善はしようと思っています」

ぱっちん「それじゃ、人体実験じゃないですか」

ツララ「そうですね」

ぱっちん「私は許しませんから」

ツララ「許してくださいなんて言いません」

ぱっちん「あなたが忘れた頃に全部壊してあげる」

ツララ「私じゃなくても？」

ぱっちん「失礼します」

パッチンはける

えな入って来る

ストップモーション

えな「怖いですかね？ やっぱり？」

ツララ「ええ」
えな「でしょうね、それでもなんですか？」
ツララ「はい」
えな「それよりも嫌なんですか？」
ツララ「今が」
えな「今が怖い？」
ツララ「未来も怖いかもしれません、わからないけど。
先に進むしかできないから、そこに行くしかなくて」
えな「今と変わらないかも」
ツララ「私、写真を撮るのが好きで。その世界ではみんな止まってて。
笑ってたり泣いてたり」
えな「たくさん撮ったんですね」
ツララ「はい、それでもっと違うものが撮りたくなって」
えな「未来？」
ツララ「未来じゃなくてもいいんですけど」
えな「戻れなくなりますけど」
ツララ「どうせなら戻れない方が」
えな「例えば一万年先」
ツララ「いけるんですか？」
えな「理論上は可能です」
ツララ「眠るだけで？」
えな「眠ると言っても、リスク高いですよ。
もしかしたらロープの中で死んじゃうかも知れませんよ」
ツララ「そんな危険な機械なんですか？」
えな「5年とかのサイクルでしか実験してないのでなんとも言えませんが」
ツララ「いいですよ。死ぬより眠る方が楽だし」
えな「あと若干の副作用があって」
ツララ「構いません」
えな「え？」
ツララ「私、今、死んでるようなものだから。覚悟してきました。
自分でも信じられないくらいアグレッシブなんです。」
えな「怖くないの？」
ツララ「怖いです、でもこのまま生きていくほうが怖い」
えな「そうかもしれない」
ツララ「あなたも？」
えな「怖いかも」

ツララ「だから眠るんでしょ？あなたも」
えな「私？」
ツララ「だからまた会えたんです。ツララさん」
えな「私、ツララでしたっけ？」
ツララ「そう、あなたがツララだった」

5場

全員が入り乱れて
一人一人が舞台上、ロープに入って行く。
映像。過去。
映像終わり。
舞台上。
残るのは、トリ、小島

小島「ねえ、まだみんな起きないの？」
トリ「うん」
小島「知ってるよ」
トリ「何を」
小島「君の事」
トリ「私の何知ってるの？」
小島「君はきっと憶えてないんだよね」
トリ「やっぱり」
小島「私その場に居たから」
トリ「会った事ありましたっけ？」
小島「君は寝てたけど」
トリ「そう」
小島「きっと知ったら悲しんじゃう。でも私は知ってた方がいいと思う。
　　こういう時どうしたらいい？」
トリ「それが本当なら」
小島「本当だよ」
トリ「教えて」
小島「欲しい？じゃあ君にプレゼント」

ツララがロープを運んできて。
ストップモーション

小島「君はあそこに居て」

ロープを指し示す小島

トリ「私は眠ってたの」

ロープの中に入るトリ

小島「私は話をしてた」

ツララ「落ち度ではありません」

小島「でも」

ツララ「心配しないで」

小島「その人」

ツララ「生きてますよ」

小島「でもロープに出てるそのマークって」

ツララ「デッド！！中にいる人が死んでいる時にでるマーク」

小島「生きてるんでしょ？」

ツララ「外側は」

小島「外側？」

ツララ「そうです、中の人死んでるの」

小島「妊娠してるの？」

ツララ「ええ」

小島「死んじゃうんですね」

ツララ「一人用なんで」

小島「かわいそう」

ツララ「そんなレッテルを貼らないで」

小島「その人は生きてて」

ツララ「忘れます」

小島「この先も生きてないといけないのに」

ツララ「睡眠によって人間は都合の悪い事を忘れます。

彼女はきっと覚えてませんよ」

小島「忘れたくない事は？」

ツララ「忘れたくない事なんてある？あなた忘れたいからここに来たんでしょ？」

小島「忘れたくない、だって全部私が見た事だから」

ツララ「使うのはあなたの自由」

小島「なんでこんな事だけ憶えてるの？」

ロープからトリ出てきて

トリ「教えてくれなくてよかったのに」

小島とえな入れ替わる

トリはける

えな「みんなに説明している事なんですか？」

ツララ「ええ」

えな「それでもみんな眠るの？」

ツララ「そうです」

えな「あなたも眠りたい？」

ツララ「どうでしょう」

えな「眠りたいからここに来たんでしょ？」

ツララ「え？」

えな「あなたがここに来たんですよ」

ツララ「私が？」

えな「わたし、秘密知ってるんです」

ツララ「秘密」

えな「寝てる間は世界は止まってる」

ツララ「あなた誰？」

6場

さくら入ってきて

ストップモーション

さくら「また2人」

ツララ「うん」

えな「二十歳は？」

さくら「知らないよ」

えな「聞きたいんだけどいい？」

さくら「何を？」

えな「さくらってロープにはいった事ないの？」

さくら「ロープ？」

ツララ「眠る機械だよ。長い間眠れるの」

さくら「ない」

えな「どうやって生きてたの？」

さくら「生きてた？」

えな「赤ちゃんから今まで」

さくら「トリがいた」

ツララ「トリ？」

さくら「いつからかトリがいた」

えな「そんなはずないよ」

さくら「よくわかんない」

ツララ「嫌だ」

さくら「どうした？ツララ」

えな「ダメだよ、ツララ」

さくら「なんの事？」

えな「忘れてて」

ぱっちんが入って来る

さくら「誰？」

ぱっちん「さく……さく……」

はけるぱっちん

さくら「待つて」

追いかけるさくら

ストップモーション

えな「小島さん？小島さん？」

ツララ「はい」

えな「どうしたんですか？」

ツララ「いえ」

えな「10年間眠ってみてどうでした？」

ツララ「本当に10年たったんですか？」

えな「経ちましたよ」

ツララ「一瞬だったような、長かったような」

えな「変な感じですか？」
ツララ「気持ち悪い」
えな「慣れますよ、その内」
ツララ「ただその、頭がフワフワしてて」
えな「思い出せますか？色々」
ツララ「いいえ、その思い出せません」
えな「思い出せないんですか？」
ツララ「真っ白な感じ」
えな「そうなんですか？」
ツララ「私、小島って言うんですか？」
えな「ええ、いえ」
ツララ「違うんですか？」
えな「私は思いついて」
ツララ「教えてください」
えな「最初の嘘をついた」
ツララ「あの」
えな「ツララさん」
ツララ「私？ツララって言うんですか？」
えな「はい、あなたの事教えてあげます」
ツララ「私のこと？」
えな「私は10日間」
ツララ「ありったけの嘘を私にくれた」
えな「君は気付かないで入れ替わってくれた」
ツララ「あの、カメラ」
えな「それ私の」
ツララ「なんで私が持ってるの？」
えな「返して」
ツララ「……嫌」
えな「私のなのに」
ツララ「触らないで！」
えな「ごめんなさい」
ツララ「10年後？」

写真を撮りつづけるツララ

えな「本当はそれも忘れないといけなかったのに」

ツララ「また明日」
えな「同じ時間に」

ツララはける
さくらとすれ違う

えな「君は最後に来た」
さくら「あの……」
えな「はい」
さくら「これってここであってますよね？」
えな「あってますよ」
さくら「眠りたいんですけど」
えな「話してください」
さくら「何を？」
えな「理由」

えながいなくなって
トリが横切る。
ストップモーション

さくら「あの」
トリ「さくら」
さくら「トリ」
トリ「どうしたのそんな顔して」
さくら「思い出せそうなの」
トリ「ダメ」
さくら「トリはいつからここにいたの？」
トリ「さっきからだよ」
さくら「嘘だ」
トリ「あなたはこの時代に生まれた唯一の人なんだから」
さくら「なんで？」
トリ「遊ぼうか？」
さくら「教えてくれないの？」
トリ「ずっとじゃないから、お願いだから」

さくらと小島入れ替わる

ストップモーション

小島「言えばいいのに」

トリ「言えない」

小島「君が産んだんでしょ？」

トリ「そうだよ。私が産んだんだ」

小島「なんで言わないの？」

トリ「嘘だから」

小島「何が？」

トリ「それもこれもどれも」

小島「君が嘘なんだ」

トリ「そう」

小島「どうでもいいけど」

トリ「あの子には言わないで」

小島「勝手」

トリ「きっと全部知ってるのはあたしだけだから」

小島「勝手に思いあがり」

トリ「思ってる事はほとんど言わないよ。普通」

小島「みんなおかしい」

トリ「気が狂いそう」

小島「撮られてるよ」

ツララ写真を撮りながら入って来る

ツララ「えな、私は君を撮りつづけるんだ」

7場

3人いなくなり

さくらと二十歳

ストップモーション

二十歳「約束したでしょ？」

さくら「君に造花あげる」

二十歳「くれなかったくせに」

さくら「送ったよ」

二十歳「届かなかった」

さくら「私眠るからその前にあげるよ」
二十歳「行っちゃうの？」
さくら「うん、いかなくちや」
二十歳「私も行く」
さくら「また会える？」
二十歳「きっとね。じゃあ君が造花をくれたら
私はそれをもって行くよ。忘れないように」
さくら「うん」
二十歳「サヨナラ」
さくら「サヨナラ」

さくら居なくなる
二十歳、造花を出して。
そこにえな入ってきてストップモーション

えな「どこいったの？」
二十歳「ちょっとロープに荷物を取りに行ったんです」
えな「そう」
二十歳「これがね」
えな「造花？」
二十歳「ロープから出てきたんです」
えな「入れてたの？」
二十歳「よくわからないんですけど」
えな「憶えてないんだ」
二十歳「思い出せるかな？」
えな「大切な思い出かもよ」
二十歳「大切な事は忘れないでしょ」
えな「忘れちゃうよ、簡単に」
二十歳「なんなんでしょうこれ？」
えな「造花でしょ？」
二十歳「それはわかるんですけど」
えな「さくらがよく作ってる」
二十歳「さくら」
えな「無くなっちゃったみたいよ花」
二十歳「そうなんだ」
えな「鹿が食べるんだって」

二十歳「淋しいですね」
えな「なきやないで平気」
二十歳「なきやないで淋しいですよ」
えな「ないものだらけだよ」
二十歳「あるものに頼りたい」
えな「私も頼ってる」

二十歳はけて
ぱっちゃんが入って来る
ストップモーション

ぱっちゃん「新聞読みました？」
えな「はい」
ぱっちゃん「あなたももう終わり」
えな「終りじゃないですよ」
ぱっちゃん「お父さん、自殺したんでしょ？」
えな「ええ」
ぱっちゃん「平気そう、お互いに大事な物を失ったのに」
えな「責任なんて取れませんから」
ぱっちゃん「人間は長く生きちゃいけないんです」
えな「それなのに眠るんですか？」
ぱっちゃん「はい」
えな「どうして？」
ぱっちゃん「あなたを一人にしたいくて」
えな「そうですか」
ぱっちゃん「許す私は眠りますから」
えな「許してくれないんですね」
ぱっちゃん「あなたが耐えられなくなるまで待ってます」
えな「憶えててくれるんですね」
ぱっちゃん「忘れませんから」
えな「嬉しいです」
ぱっちゃん「ツララさん」
えな「はい」
ぱっちゃん「あなたの逃げ場所無くしてあげる」

8場

えな居なくなる

ぱっちゃん下手ロープに向けて鈍器を振り上げる

ストップモーション

ツララ入ってきて

ツララ「何してるの？それ私のロープ」

ぱっちゃん「あなたの？」

ツララ「はい、あの赤いところ叩かないでくださいね」

ぱっちゃん「叩きます」

ツララ「壊れちゃいますから」

ぱっちゃん「あなた」

ツララ「憶えてます？私は覚えてます、ぱっちゃんでしょ？」

ぱっちゃん「はい」

ツララ「私が担当してた」

ぱっちゃん「あなたもなんですね」

ツララ「憶えてませんか？私」

ぱっちゃん「小島さん」

ツララ「違いますけど」

ぱっちゃん「会った事あるから」

ツララ「違います」

ぱっちゃん「これのせいですよね」

ぱっちゃんロープの赤いところを叩く

壊れるロープ

ツララ「ああ！」

ぱっちゃん「憶えてますよ、私色々調べましたから」

ツララ「何言ってるの？」

ぱっちゃん「写真、まだ撮ってるの？」

ツララ「何？」

ぱっちゃん「カメラ持ってるから」

ツララ「これは」

ぱっちゃん「憶えてるんだよ」

ツララ「やめてよ」

ぱっちゃん「見せて」

ツララ「見ない」

ぱっちゃん「怖がらないで」
ツララ「まだ撮ってるんだから」
ぱっちゃん「思い出して」
ツララ「何を？」
ぱっちゃん「あなた誰？」
ツララ「やめてよ」

ツララいなくなろうとする
さくら入ってきて

さくら「何してる？」

ぱっちゃんいなくなる

さくら「待って！また逃げるの？」
ツララ「さくら」
さくら「どうしたの？」
ツララ「やばい、なんか」
さくら「怖がらないでいい、怖くないよ」
ツララ「写真」
さくら「うん」
ツララ「見れないの」
さくら「撮るだけ？」
ツララ「うん」
さくら「貸して……嫌？」
ツララ「見なきゃ」
さくら「本当はね。一緒に見てあげるから」

カメラを覗き込む2人

ツララ「なにこれ？」

スクリーンに映る数々の写真

さくら「私」

「記憶」

さくらはけて
ぱっちゃん、えな
ストップモーション

トリ「1万年前、私達は生活してた」

ツララ入ってきて

ツララ「ねーまた減ってるよ」
えな「何が？」
ツララ「ロープ」
ぱっちゃん「また？」
トリ「デッドのやつでしょ？」
ツララ「まだ使えるのに」
えな「誰が壊すんだろう？」
ツララ「意味わかんない」
ぱっちゃん「ねー」
えな「それにしても暑い」
ツララ「同感」
ぱっちゃん「温暖化」
えな「どころじゃないよ」
ツララ「何度あるの？」
トリ「知らないよ、小島さんは眠ってて」
ぱっちゃん「テレビ無いんだっけ」
ツララ「ないない、あるわけない」
トリ「私達は普通に生活してた」
えな「暇過ぎて死んじゃう」
ツララ「死ねば？」
えな「酷いな」
ツララ「冗談」
ぱっちゃん「私はトリだった、私の密かな計画」
えな「ぱっちゃん」
トリ「なに？」
えな「話して」

位置が変わりストップモーション

ツララ「最悪」

トリ「それで何って言ったと思う？もう僕の事は忘れてだって」

えな「えー」

ぱっちゃん「引くね流石に」

トリ「だから私は覚えてる」

えな「執念だね」

ツララ「私だったら忘れるね」

トリ「もうね、その時のあいつの顔が忘れられなくて、こんな顔」

ツララ「どんな顔？」

トリ「こんな顔」

ツララ「微妙」

ぱっちゃん「どんな顔？」

トリ「だからこんな顔」

えな「さっきと違うじゃん！」

トリ「こんな顔だった、私は得意だった」

ツララ「もっと話して」

トリ「思い出すのが得意で」

えな「ええ、もういいよ」

トリ「君は困ってた」

ぱっちゃん「この前のお父さんだと思って話しかけたらカーネルサンダースだった話して」

ツララ「なにその話」

トリ「ずーっとずーっと昔」

えな「そうだよ、君は寝てたんだから」

トリ「私は覚えてた」

「現存するロープは145台」

「私は君を選んだ」

ツララとぱっちゃんいなくなって

ストップ

トリ「久しぶりだね」

えな「うん」
トリ「取引しようか？」
えな「え？」
トリ「憶えてるんだ」
えな「私忘れてる」
トリ「憶えてるくせに」
えな「ばれた？」
トリ「どうやるの？」
えな「どうやるって？」
トリ「記憶変えるの」
えな「私しか知らない」
トリ「教えて、黙っててあげるから」
えな「こんなに苦しいのに」
トリ「私に分けて」
えな「どうしたい？」
トリ「子供を育てたい」
えな「いないのに」
トリ「誰でもいい、まだ寝てる人なら大丈夫なの？」
えな「そうじゃない」
トリ「やり方はあるんでしょ？」
えな「ずっとは続かないよ、君みたいに」
トリ「思い出してない間は幸せだった」
えな「逃げてる」
トリ「それでいいの」
えな「共犯」
トリ「でもいい」
えな「帰ってこないのに」
トリ「私は母親だ」
えな「なれなかった」
トリ「今度こそ教えてね」
えな「私を逃がして」
トリ「交渉成立？」
えな「してあげてもいい」
トリ「どうするの？」
えな「まずロープで寝かせるの」
トリ「それで？」

えな「2人きりで」

トリ「思いこませるの？」

えな「そう」

トリ「ありがとう、誰にも言わないから、逃げていいよ」

えな「エゴだね、お互いに。私本当は嬉しかったけどね。

罪は分割されて、私は逃げれた。起きてから3日間、幸せであれば十分。

本来なら、私は1日だって許されなかったはずだから」

小島とトリ入れ替わって

ストップモーション

えな「えなさん」

小島「はい」

えな「どうして眠ろうと思ったんですか？」

小島「なんとなくです。それが理由じゃダメ？」

えな「ダメじゃないですけど」

小島「そうだなあー、嫌な事忘れたい」

えな「忘れる機械じゃありませんよ」

小島「聞きました、忘れられるって」

えな「あなたがあなたじゃなくなるかも」

小島「生まれ変わりたい」

えな「生まれ変わる機械じゃないのに」

小島「後悔してるの？こんな事になって。あなた嫌な事だらけでしょ？

ていうか私があなただったら嫌。重い。」

えな「後悔してますよ、平気じゃない」

小島「平気そう」

えな「嘘ついてるんです」

小島「みんないなくなっちゃいましたよ、眠っちゃって」

えな「私のせい？」

小島「誰のせいでもないのに、気にしてるんでしょ？」

えな「もしも未来に行って、今じゃなくなって。

全部忘れてて、文明もなくて、好きな人もいなくて、生きていけるかな？」

小島「幸せかもしれない、想像できないから」

えな「羨ましい」

小島「私が？」

えな「嘘ついてない」

小島「嘘つかなくていいですよ」
えな「嘘つかなくなったら私ボロボロになっちゃうから」
小島「可愛そう」
えな「言わないで」
小島「最高に可哀想」
えな「言わないでよ」
小島「甘えてるの？」
えな「あなたになりたい」
小島「それは無理だよ」
えな「変わってくれる？」
小島「変わる？」
えな「私は嘘しかつけないの」

ツララが入って来る、小島ははける
ストップモーション

えな「ツララ」
ツララ「じゃないよ」
えな「どうしたの？」
ツララ「私君が嫌いだよ」
えな「昔からでしょ？」
ツララ「怖い」
えな「怖がってたの？」
ツララ「信じて欲しかったの？」
えな「どうしよう」
ツララ「もう信じないから」
えな「私がいなくなっちゃった」
ツララ「ずっといるよそこに」
えな「また逃げたくなる」
ツララ「どこまでも逃げたらその先に何かあるの？」
えな「何も無かったら嫌だな」
ツララ「その方が楽でしょ」

ツララ、えなとトリ、さくら入れ替わる
ストップモーション

さくら「トリごめんね」
トリ「さくら」
さくら「トリの事思い出せなくて」
トリ「思い出さなくていいよ」
さくら「トリは私のお母さんなんだよね」
トリ「そうだよ」
さくら「思い出すなんて変かな？」
トリ「そんなはずないから」
さくら「あなたトリじゃない」
トリ「知ってるよ」
さくら「あなたが嘘ついているの？」

9場

2人いなくなって
えなが上手からロープを運んでくる
そこにぼっちゃんが現れて
ストップ

えな「ぼっちゃんさん」
ぼっちゃん「はい」
えな「どうですか？10年間眠った気分は」
ぼっちゃん「忘れてません」
えな「やりづらい人」
ぼっちゃん「あなたの事」
えな「もう忘れてるかも」
ぼっちゃん「小細工しないで」
えな「これ見て下さい」
ぼっちゃん「……」
えな「あなたの娘さん」
ぼっちゃん「さくら？」
えな「大きくなったでしょ？去年来たんです」
ぼっちゃん「嘘、小細工しないで」
えな「本当」
ぼっちゃん「やめて」
えな「追いかけてきたの、あなたを」
ぼっちゃん「忘れたかった」

えな「勝手ですね。憶えていたいとか忘れたいとか」
ぱっちゃん「人間だから」
えな「あなたもわたしも彼女も忘れちゃえば楽なのに」
ぱっちゃん「合わせる顔がないから」
えな「記憶変えてあげましょうか？」
ぱっちゃん「あなた」
えな「できますよ」
ぱっちゃん「何言ってるの？」
えな「面白いでしょ？」
ぱっちゃん「そんな事できるわけない」
えな「あなた、本当に彼女の母親なんですか？」
ぱっちゃん「そうですよ」
えな「本当に？」
ぱっちゃん「そうです」
えな「嘘なのに」
ぱっちゃん「え？」
えな「あなたは他人ですよ」
ぱっちゃん「変えたの？」
えな「どうでしょう？」
ぱっちゃん「やめてよ」
えな「冗談です」
ぱっちゃん「楽しい？」
えな「あなたが眠っていた間、時間は流れてるんです。
今までだってそう、みんな住みやすい世界を作ろうとしてて
ロープを作り出した」
ぱっちゃん「眠れる機械」
えな「次はどうしたい？」
ぱっちゃん「忘れられた」
えな「次はどうしたいの？」
ぱっちゃん「忘れて、そして」
えな「あいつになりたい」

「記憶は変えられる」

舞台上、さくらと二十歳ストップモーション

さくら「先生」
二十歳「はい、どうしました？」
さくら「先生、来年定年退職なさるって本当ですか？」
二十歳「はい」
さくら「私、先生に本当に感謝してるんです」
二十歳「さくらさん」
さくら「はい」
二十歳「あなたがくれた造花」
さくら「はい」
二十歳「私ずっと持ってますから」
さくら「嬉しいです」
二十歳「あなたと友達になりたかった、忘れたかった。私は自分で忘れた。
あなたが未来、私に教えなければそれで良かったのに」
さくら「それでも良かった、思い出してくれて」

さくらと二十歳はけて
上手奥、ツララと小島ストップモーション

小島「思い出した？」
ツララ「忘れてたかったけど」
小島「思い出せて良かった」
ツララ「知ってたの？」
小島「うん」
ツララ「それでも良かった？」
小島「誰かが許してあげなくちゃ」
ツララ「えな」
小島「うん？」
ツララ「君が好きだよ」
小島「ありがとう」
ツララ「もうね、忘れたくない」
小島「嫌な事も？」
ツララ「全部覚えてたい」
小島「立派」
ツララ「写真もう撮らなくてもいい」
小島「そう？」
ツララ「全部憶えるの、もう目は閉じないで。」

全部見るの」

小島「付き添ってあげてもいいよ」

ツララ「わがまま言ってない？」

小島「もう一人じゃ眠れないかも」

ツララ「ずっと起きてたらどうなるかな？」

小島「朝が来なくなる」

ツララ「太陽がなくなって」

小島「不安になるね」

ツララ「2人なら寝れるかも」

小島「やってみる？」

ツララ「朝起きたらおはようって言ってね」

小島「うん」

「おやすみ」

さくらとえな

ストップモーション

さくら「罪悪感ないんですか？」

えな「なんで？」

さくら「人間はそんなに強くない」

えな「知ってます」

さくら「でしょうね」

えな「弱いから眠るの？」

さくら「生きていけないから」

えな「死ぬまでしか生きられないのに」

さくら「後悔したくないから」

えな「だから追いかけるの？」

さくら「はい」

えな「忘れるんですよ」

さくら「副作用」

えな「今思ってることも」

さくら「忘れませんから」

えな「できたらいいのに」

さくら「あなたの事も」

えな「凄い自信」

さくら「忘れません、私花が好きだから、咲いていたら思い出せる」

えな「花がなくなったら？」

さくら「きっと咲いてますから」

えな「君はあの時、たくらんできた。私のことも忘れなかった」

さくら「いつか花は枯れてそこに咲いていた記憶も

なくなった頃、なにも無いところに花が咲いてたら。

忘れた君にも思い出して欲しい。」

舞台上、二十歳が造花の花びらを開いていく

さくら「先生、60歳の誕生日おめでとうございます。

これからもどうかお元気で」

二十歳が倒れる

「いつか思い出せたら」

「私はあなたが嫌いかもしれない」

「ねえツララ」

「どうして？」

「あなたはここに来たの？」

10場

えなが中心に。

ぱっちゃんストップモーション

ぱっちゃん「いつか許されるかしら？」

えな「許されないでしょう」

ぱっちゃん「愛する人が眠って」

えな「望んだから」

ぱっちゃん「永遠に眠っちゃって」

えな「知らないです」

ぱっちゃん「どうして平気なの？」

えな「平気な訳ないじゃないですか」

ツララ

ストップモーション

ツララ「実験」

えな「したかったんじゃない」

ツララ「あなたが逃げる為？」

えな「人の為に」

ツララ「誰かが犠牲になってもいいの？」

えな「そんな事ない」

ツララ「事故じゃないもの」

えな「過去には戻れないから」

ツララ「辛いの？」

えな「辛い」

ツララ「誰だってそうだよ、あなただけじゃないよ」

えな「私は私しかわからないから」

ツララ「勝手過ぎる」

えな「みんなそうでしょ？」

トリ

ストップモーション

トリ「子供返して」

えな「なんで全部私なの？」

トリ「私の記憶の最後はあなた」

えな「損してる」

トリ「失ってないくせに」

えな「お父さんが死んだよ」

トリ「ちゃんと背負って」

えな「背負えない」

トリ「忘れないで」

えな「全部忘れる」

トリ「無理だよ」

えな「一人でなんて背負えない、お願いだから

私の記憶貰って」

トリ「取引」

小島

ストップモーション

小島「大変そう」
えな「貰ってくれる？」
小島「できないよ」
えな「できる」
小島「私は眠りたいだけ」
えな「ずるい」
小島「目的が変わっちゃってる」
えな「忘れない」
小島「忘れるんじゃないよ」
えな「えな」
小島「眠ってる間は世界が止まってる、だから何も変わるはずない」
えな「わかってるから」
小島「無駄だよ」
えな「思い出したくなかった」
小島「君も貰ってたんだプレゼント」

えなポケットから造花を取り出して

えな「花じゃなかったんだ」

11場

えなと入れ替わり、さくら、トリが残り

さくら「嘔吐き」
トリ「いわれなくなかったな」
さくら「みんな嘔吐きだ、私も」
トリ「戻れたらいいのに」
さくら「ごめんね」
トリ「さくら」
さくら「あなたはお母さんじゃない」
トリ「ダメ」
さくら「あなたはぱっちゃん」
トリ「こっちに来て」
さくら「楽しかったけどさよならしなきゃ」
トリ「もう一回眠ろう？」

さくら「私は花でいたい」
トリ「もう一回」
さくら「あなたが作った造花じゃない」
トリ「私の子供でいて」
さくら「もう終わりにしよう」
トリ「そんな事言わないで！」

ぱっちゃんがロープを壊そうとしている

さくら「私が追いかけたのはあなただよ」
ぱっちゃん「さく……」
さくら「お母さん」
ぱっちゃん「さくら」
トリ「なんで？」
さくら「私ね、造花を作るのが好きだった。
お母さんが教えてくれたんだよ。枯れない花。
ずっと忘れない為に、私は造花を作ったの」
トリ「ニセモノなのに」
ぱっちゃん「ごめんね、さくら。おかあさんやりたい事やったから」
さくら「これあげる」
ぱっちゃん「私に？」
さくら「ありがとうお母さん」
ぱっちゃん「なに？」
さくら「当たり前前の事言えなかったから言いたくて」
ぱっちゃん「ありがとう」
トリ「本当なんてなければいいのに」
さくら「それがいいたくてここまで来たの」
ぱっちゃん「それだけの為に？」
さくら「平気」
トリ「あなたになりたい」
さくら「理由なんてなんでもいい」
トリ「ありがとうって言って欲しいかったけど死んでたから」
ぱっちゃん「あと2台で終わりなの」
さくら「頑張って」

ぱっちゃんロープを壊そうとする

トリがぱっちんをロープの中に押しこむ

さくら「何してるの？」

トリ「またあなたを育てるの」

ぱっちん「さくら」

トリ「眠って」

さくら「おかあさん」

トリ、ぱっちん2人でロープの中に。

パンツという音と共に血に染まる

さくら「壊れちゃった……」

「残り一台」

ツララが泣いてて

小島が通りかかる

小島「泣いてるの？」

ツララ「もうやめる」

小島「眠らないの？」

ツララ「辛いよ」

小島「辛いから忘れたい？」

ツララ「逃げるだけになるのは嫌だ」

小島「我が俣だね、小島……」

ツララ「呼び捨てられるの嫌」

小島「小島さん、いつもここで会うのに話した事なかったね」

ツララ「あなた」

小島「えなって呼んで」

ツララ「えな」

小島「眠るのやめるんだ？」

ツララ「眠りたいけど、きっと世界は変わらない。どこに行っても

それが例えば未来でも」

小島「変わらなくていいじゃん、変わらなくて良い事もあるよ」

ツララ「不安じゃないの？」

小島「どうして？先なんてわからないでしょ？不安になってたらキリが無い」

ツララ「一人きりになったら？」
小島「ネガティブだね」
ツララ「私は何も撮れなくなる」
小島「じゃあ約束してあげる」
ツララ「何？」
小島「起きたら私を撮って」
ツララ「えなを？」
小島「いつでも、一緒じゃないと撮れないよ」
ツララ「どこにいても」
小島「撮って、観察して、そこに君がいて私がいる」
ツララ「友達になってくれるの？」
小島「それいいかもね、お互いに忘れない」
ツララ「約束」
小島「君が起きたらおはようって言ってあげるから」
ツララ「だから私は眠れた、起きた時に一人きりだと不安だから。
それから10年後、私はツララになったけど。
それでも君を撮りつづけたよ、えな」

ツララ、小島の写真を撮る
ピースする小島

写真が映って。

12場

下手にロープ
えな中央、造花を開いて立っている

えな「おはよう、ある日起きたら誰もいなかった。
誰も何も言わなくて、残されたのは私の記憶。
きっと本当なんだろう。罪悪感が重くって。
私は眠くなる。この世界に花はもうなくなってた。
君がくれた造花にこう書いてあった。
おはよう、ツララ。私は君を忘れてないよ。
あなたがくれたの？」

さくら出てきて

さくら「そうだよ」
えな「そう」
さくら「もう逃げられないよ」
えな「逃げる必要がないから」
さくら「みんないなくなっちゃった」
えな「そうみたい」
さくら「あなたを許す人も」
えな「君がいるよ」
さくら「私？」
えな「君が私を許して」
さくら「いいよ」
えな「嬉しい」
さくら「許しつづけてあげる」
えな「優しいね」
さくら「だから安心して、朝起きたらおはようって言ってあげる」
えな「君のこと忘れてたらどうしよう」
さくら「忘れないよ」
えな「記憶なんて曖昧」
さくら「憶えててあげるから」
えな「嘘吐き」
さくら「世界に2人だけ」
えな「静だね」
さくら「誰もいないから」
えな「寝てるときと一緒だ」
さくら「もうどっちでもいい」
えな「でも私は忘れたい、私がした事全部憶えてるなんて無理だ」
さくら「眠るの？」
えな「ダメかな？」
さくら「止めないよ」
えな「君も一緒に」
さくら「うん」
えな「おやすみ」
さくら「おやすみ」
えな「一万年後に」

えなロープに入る

さくら「最後の一台にツララが入って、世界に私と彼女の沈黙。

私は精一杯の笑顔で嘘をついた。

君は眠ってる。私はもう眠らないから。

最後まで生きて。おはようって言ってあげるから」

「どれくらいわからなくなって不安になる事があって」

「朝起きて誰もいなくて」

「きっと世界は止まったまんま」

「2度と同じ朝が無くて」

「例えそれが絶望でも、君におはようって言って欲しい」

えなが起きる

周りを見まわしても誰もいない。

造花。

えなは造花を拾って。

一人で笑ってる。

えな「嘘吐き」

暗転

終わり